

当事者意識を育むクラブワークの方法と課題」

- クラブで「居場所感」「一体感」「当事者意識」をどう育むか -

はじめに

クラブメンバーがクラブに対して「居場所感」「一体感」や「愛着」を持ち、さらに自分のクラブを良くしたいといった「当事者意識」を高めるにはどうしたらよいのでしょうか。

クラブに入ってすぐに居場所感や愛着を持てるわけではありません。まして自分のクラブを良くしたいなど思えるはずもありません。新メンバーがどうやって当事者になっていくのか、そのプロセスを押さえて支援をすることが重要です。

新メンバーが当事者になるまでのプロセスは次のように考えられます。

「クラブの一員として認められているという安心感を得る(安心感、一体感)」-「クラブの中で存在感がある(存在感)」-「自分からクラブを良くしたい(責任感、当事者意識)」という流れです。本稿では、この流れにしたがってクラブワークのポイントを考えてみましょう。

1. 「つきあいの流儀」とクラブワーク

1) 安心感を与える「つきあいの流儀」

新メンバーに安心感を与える基礎となるのが、クラブでの「つきあいの流儀」です。クラブはスポーツの場であり、社交の場でもあります。

ジンメルという社会学者は、社交の条件として「秘密」と「配慮」をあげています。

「秘密」とは、必要最低限の情報以外はお互いが秘密として、不問にするという態度です。「配慮」とは、相手に対する思いやりで代表される心的感覚であり、「自己顕示と自己抑制」、つまり自分をさらけ出すことと自分を抑えることのバランスの自覚に立ったものです(菅野,2003,p.150)。

「秘密」と「配慮」をめぐるルール感覚を共有することが「つきあいの流儀」となります。

「つきあいの流儀」は、メンバーの経歴や現在の職業など、何を、どこまで聞くことが許されるのか等、些細な会話の隅々まで浸透させる必要があります。

ともすれば競技レベルの上下、あるいは地域活動での役員経験の有無といった実社会の関係構造がクラブの場に持ち込まれ、スポーツ経験が少なく地域での活動を行っていない若年者、障がい者等は、居づらさを感じ、クラブに加入し続けることが困難となる場合もあります。

「つきあいの流儀」を洗練させることが重要です。

2) つきあいの流儀と「ヤレヤレ空間」の創出

スポーツの場面、いわば「コートの中」では競技レベルの差異が、また「実社会」では、社会的地位や役割の差異があります。

クラブでは、「コートの中」と「実社会」の間にクラブメンバーが「ヤレヤレ」とできる空間、いわば「コートの外」の空間が大切です。日常の役割や競技力の差異を全く問うことなく、スポーツの愛好者として、例えば、課長の田中さんでもレギュラーの田中さんでもなく、一メンバーの田中さんとして、みんなでヤレヤレできる空間を創る工夫が、安心感や居場所感を醸成する上でとても重要です。

練習や試合の後の一時、クラブハウスでの会話や交流会の工夫、あるいは、揃いのユニフォームを着て自チームを応援することで一体感や共振する世界を創る工夫など、つきあいの流儀に基づくクラブワークの工夫と取組みが重要です。

2. 当事者への道と「ワレワレ空間」

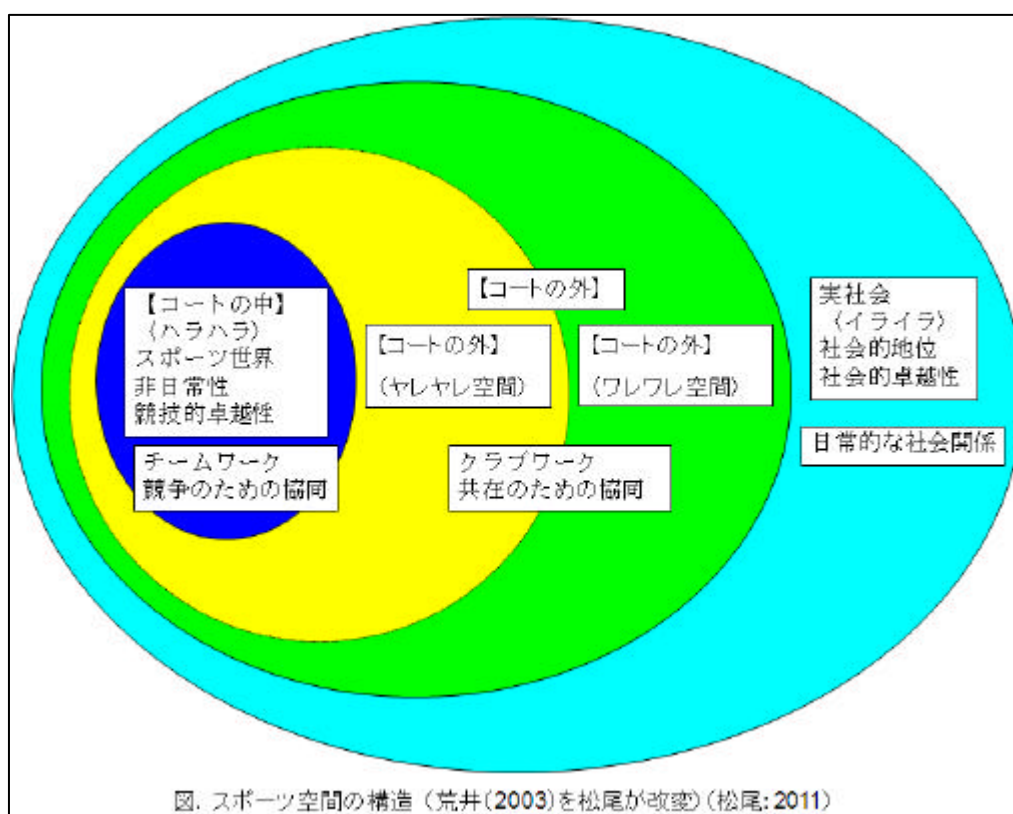
クラブで自分の存在感を確認できる場とはどんな場でしょうか。それはクラブ内での役割の明確化と働きの承認があるかにかかっています。役割が明確であり、その働きへの承認がある、それが「存在感」の支えになります。新メンバーを含め、すべてのメンバーが連なり、役割を果たせる仕組みと仕掛けが重要です。

ただそれだけでは「当事者」とはなりません。所属するクラブが抱える課題、例えば、会員数が伸びない、指導者が足りない、活動場所の確保が難しい、クラブの財政が厳しいなど、クラブが抱える課題の共有と、その解決に向けて皆が真剣に語り合える機会が必要です。そして皆で力を合わせて一つの課題を解決する。その経験が一体感と愛着をより深くしますし、自分のクラブをさらに良くしたいと思ってもらえる大切な機会となります。

すべてのメンバーが対等なアクターとして認められ、気軽にしかし真剣に議論できる空気感の醸成と機会をいかに創造できるか、「コートの外」にいかに「ワレワレ空間」を創れるか、機能させるかがクラブワークの力の見せ所であり、メンバーを当事者に導く鍵と言えます。

3. クラブワークとスポーツ空間の創造

荒井貞光氏(2003,p.83)は、スポーツ空間を前述のように「コートの中」と「実社会」の間に「コートの外」を位置づけ、ここで求められるのが「共在のための協同」であり、それをクラブワークと呼びました。筆者は「コートの外」をさらに「ヤレヤレ空間」と「ワレワレ空間」に分けて考える必要があると考えています(図参照)。



ヤレヤレと寛ぎの気分を伴う相互承認の「ヤレヤレ空間」とスポーツクラブの抱える問題やスポーツ環境をめぐる課題を共有し、議論し、外部に発信していく「ワレワレ空間」を創造する。

これらの空間を磨くことが「安心感」「居場所感」「一体感」「存在感」そして「クラブの当事者」への導きとなるだけでなく、コミュニティづくりに寄与できるクラブ力を高めることにつながるものと思われま

(松尾哲矢 立教大学 コミュニテ福祉学部教授)

(本稿については、詳細は拙稿「つながり」の方法としてのスポーツクラブとコミュニティ形成」、松田恵示・松尾哲矢・安松幹展編、『福祉社会のアミューズメントとスポーツ - 身体からのパースペクティブ』, 世界思想社, pp.164-186, (2010)をご参照ください。)

【参考文献】

- ・菅野仁(2003)『ジンメル・つながりの哲学』日本放送協会
- ・荒井貞光(2003)『クラブ文化が人を育てる - 学校・地域を再生するスポーツクラブ論』大修館書店